

# 社 会 科

## 〔Ⅰ〕 高校世界史学習に対する生徒の構え とそれをふまえた学習の一方法

都 築 亨

〔要旨〕2年の前期の世界史学習の報告である。関心の乏しく、又偏りがちな現在の高校生世代に、少しでも主体的に学習に立ちむかわせる方策の一つとして発表学習をとり上げた。テレビや漫画に向いている目を少しでも「世界史」に向けさせる手だてを追求しようとして。

### 1. 本年度の世界史学習にあたって

世界史が3～4単位になった時<sup>註(1)</sup>内容の精選が、担当者の最たる関心事になったのは一般的傾向であり、私どももその例に洩れない。そして、今迄にいろいろその検討を加えてきた。<sup>註(2)</sup>しかし、それにもやはり限度があり、たゞ内容の問題としてだけでは解消できない面をもっているし、まして高校進学率の上昇にともなって多様の能力適性をもった生徒に「世界史」の学習内容を習得させ、消化させるためには、「精選」以外に何らかの方法を工夫しなければならない状況があった。

本年度、2年の世界史を担当するにあたって、私は、

① 思い切って内容をカットし、年代的、地域的にも限定した範囲の中で、世界史を学習させる。そのカットないし簡略化の対象は古代史の殆んどの部分、そして、15～18世紀なかばのアジア史。

② 学習のメインに生徒による発表をとり入れる。それは形としてはグループ学習ではなく、1人又は2人で共同研究をしたテーマ内容をレポートし、できればゼミ形式でHR全員の学習にもってゆく。

③ 学習の効率化と①・②で欠落した部分の穴うめをするため、テレビの教育番組や、特集番組のビデオ録画を系統的にとり入れる。

以上の3点を学習の柱として、週3時間の世界史を昨年からすゝめてきたのである。その前提として私の念頭にあったのは、世界史は(他の日本史や政経と比べてみても)詳しく学習するとなれば週5時間どころか6時間でも不足を感じずる内容を含んでおり、要は生徒の学習意欲をどのようにしたら高められるか、という点に帰着すると考えたからである。どこにも見られる現象かもしれないが、英数の勉強だけを高校の勉強と割り切って「社会科」は息抜きの時間、その教科書は学校のロッカーに保管するものという多数の生徒の「世界史」についての意識状況の中で、(高校の入試

科目が英数国3教科に限定されて特にそうした傾向が  
つよくなつたと考えるのは僻目だろうか。)どうすれば歴史を学ぶことに積極的な意味を見出すように指導できるだろうか、ということである。

数年前まで、私は新しい「世界史」の全体像を何とかして把み、又生徒にもつかませたいという想いにかられてきた。単なる西洋史と東洋史の継ぎ合せでなく、又ヨーロッパ列強のアジア支配の世界史でもなく、西洋の凋落とアジア・アフリカの民族的息吹きが今までの世界史を大きく変えようとしている中で、現代の日本に立脚点をおいた新しい世界史像をたしかめることが、高校での世界史学習の第一の意味ではないかと考えてきた。しかし、アジアに多くのスペースをさいただけの世界史は所詮、ヨーロッパ中心史観の裏がえしにすぎない<sup>註(3)</sup>とすれば、「繁栄」の幻想の中で、自分を中産階級の生活感覚の中にとっぷりつけた現在の高校生にとっては、私の画いたような世界史は、「アジア・アフリカの貧しさ」を学習し、「現在の日本はそれとは違う」「もっとヨーロッパやアメリカについてやった方がよかったのに」とうけとられ、「過ぎ去った過去は過去として、自分たちは現在に生きるのデス」という程度の極めて皮相な歴史認識を与えたに過ぎなかった。それならばむしろ受験指導の一環とわり切って、共通一次めあての世界史学習をすゝめた方がより効率のあがる授業になったことであろう。

念のために付言するならば、私は共通一次めあての知識の定着化・効率化を考えて、学習方法を何とかしようと考えているのではなく、受験科目としてしか「世界史」を考えず、したがって世界史で受験しない生徒にとっては「空白」の時間——しかしそうした生徒達も授業中は一見静かに真面目に授業をうけ、テスト前だけは一生懸命勉強する——そうした「世界史」の学習状況の中で、何とかして身近に「世界史」を考えさせたかったに過ぎない。

### 2. 生徒の「世界史」と国についての事前認識

高校で「世界史」を学ぶ前に(小中学校で)世界史的内容を学んで印象に残っているのはどのような個所だろうか。4月早々にアンケートをとったその結果をまずまとめておきたい。

I 印象に残る個所	男	女	計
人類の出現・原始社会	0	3	3
エジプト・メソポタミア	8	10	18
ローマ帝国	3	2	5
アレキサンター帝国	1	0	1
封建社会	0	2	2
十字軍	8	6	14
ばら戦争	0	1	1
古代の日本大化改新	2	0	2
南北朝・下剋上	2	0	2
アヘン戦争	1	1	2
ルネサンス	4	4	8
宗教改革 宗教戦争	2	1	3
市民革命 共和政	2	3	5
アメリカの独立	3	4	7
フランス革命	4	17	21
産業革命	6	3	9
南北戦争	2	1	3
クリミア戦争	1	0	1
明治維新	1	2	3
ロシア革命	2	3	5
第一次大戦	0	1	1
二二六 ヒトラー	1	1	1
第二次大戦	10	6	16

アメリカ独立、フランス革命、産業革命そして第二次大戦等は、中学校での「歴史的分野」のメインでもあり、肯けるか、意外に多かったのはエジプト・メソポタミアと十字軍であった。

歴史上、最も興味をもっている国をあげなさい。という形でたすねたところ。(選択肢は設けない)

II 興味のある国	男	女	計
古代エジプト	8	9	17
古代ギリシア	3	2	5
古代ローマ(帝国)	9	2	11
イスラエル	2	0	2
アレクサンター帝国	2	0	2
中国	11	6	17
唐	(2)	0	(2)
元 モンゴル	(2)	0	(2)
明清	(1)	(2)	(3)
日本	4	4	8
ムガル帝国	1	1	2
インカ・メキシコ	7	0	7
サラセン・ウマイヤ朝	4	1	5
ロシア	0	3	3
フランス	5	12	17
イギリス	4	3	7
ドイツ	1	2	3

ソ 連	1	2	3
アメリカ合衆国	8	3	11

興味をもてるのはエジプト・ローマそしてフランス・アメリカ合衆国と印象に残っている事項と相通ずる。世界史の知識のより所となっているのは

III 世界史については	男	女	計
ア、新聞・雑誌記事	21	9	30
イ、テレビ・ラジオ	35	26	61
ウ、小中の授業で	59	54	113
コ、伝記・小説から	24	23	47
オ、父母兄弟から	4	4	8
カ、その他	5	1	6

小学校・中学校で、世界史教材が極めて少ないというものの、それでもこうした知識をこれまでに得ているのは42%までが学校の授業であり、国語や道德の時間に依存している。父母兄弟から得ている知識が極めて少いことは一考の価値のあることであろう。

好きな人物と文化を発展させるために貢献した人物についても一応表示する。(1名のみは省略する)

IV 好きな歴史上の人物	男	女	計
ソクラテス	1	1	2
アレクサンター	6	2	8
クレオパトラ	0	6	6
キリスト	3	4	7
聖徳太子	3	0	3
平 将門	1	1	2
源 頼朝	2	0	2
織田 信長	3	2	5
豊臣 秀吉	2	0	2
マルコ・ポーロ	3	0	1
フオン・ブラウン	2	0	2
レオナルド・ダ・ビンチ	2	2	4
ナポレオン	12	15	27
リンカーン	4	2	6
ノーベル	0	2	2
ガンヂー	4	1	5
坂本 竜馬	0	2	2
ヒトラー	2	0	2

V 文化を発展させるのに貢献した人物	男	女	計
ソクラテス	0	2	2
アレクサンター	2	1	3
キリスト	13	5	18
孔子	1	3	4
ニュートン	1	1	2
ガリレオ・ガリレイ	1	2	3
レオナルド・ダ・ビンチ	4	5	9
マルコ・ポーロ	3	0	3

コロンブス	2	0	2
ルター	2	4	6
ルソー	4	0	4
ナポレオン	2	5	7
ワシントン	2	0	2
ワット	2	0	2
エジソン	5	1	6
ガンジー	3	0	3
リンカーン	3	0	3
ヒトラー	5	1	6
伊藤 博文	1	1	2
レーニン	1	4	5
マッカーサー	2	0	2
スターリン	0	2	2

好きな国ときらいな国というのは多分に世界史を学ぶ上で先入観になるかもしれない。

Ⅵ 好きな国	男	女	計	%
中 国	2	0	2	1.5
エジプト	3	2	5	3.8
カナダ	5	4	9	6.8
ギリシア	11	7	18	13.6
イギリス	5	11	16	12.1
フランス	8	9	17	12.9
イタリア	1	1	2	1.5
アメリカ合衆国	14	4	18	13.6
ド イ ツ	5	2	7	5.3
ス イ ス	14	14	28	21.2
オーストラリア	4	1	5	3.8
ソビエト連邦	1	1	2	1.5
スウェーデン	1	2	3	2.3

Ⅶ 嫌いな国	男	女	計	%
中 国	3	3	6	4.7
朝 鮮	8	13	21	16.3
イ ラ ン	6	3	9	6.0
エジプト	2	0	2	1.5
イギリス	3	1	4	3.1
アメリカ合衆国	1	2	3	2.3
ド イ ツ	1	3	4	3.1
ソビエト連邦	37	14	51	39.5
ベトナム	12	11	23	17.8
ケ ニ ア	1	3	4	3.1
ブラジル	0	2	2	1.5

Ⅷ 先進国は	男	女	計	%
イ ン ド	1	1	2	0.5
カナダ	2	5	7	1.8
イギリス	55	46	101	25.3

フランス	14	15	29	7.3
イタリア	2	0	2	0.5
アメリカ合衆国	71	56	127	37.7
ド イ ツ	25	21	46	11.5
ス イ ス	4	2	6	1.5
ソビエト連邦	48	27	75	18.6
スウェーデン	3	2	5	1.3

Ⅸ 文明が最もはやく起ったのは	男	女	計	%
中 国	67	41	108	27.4
イ ン ド	50	37	87	22.0
イ ラ ン	8	4	12	3.0
エジプト	68	54	122	31.0
ギリシア	17	32	49	12.4
イギリス	3	2	5	1.3
フランス	2	2	4	1.0
イタリア	3	2	5	1.3
ブラジル	2	0	2	0.5

・ⅧとⅨについては1人について3つまで選択させた。

### 3. 四世紀以降の世界史を農耕文明と遊牧社会との交渉としてとらえること

世界史を「農耕文明」と「遊牧民族」との対抗関係でとらえてみようと思いついたのは、別にイブニング・ハルトウーンの「歴史序説」に刺戟されてのことではない。一つは冒頭にも指摘したように3単位世界史でどこかをカットするとなれば、古い所がよいだろうということ。そしてアンケートにもあらわれているように四大文明とギリシア・ローマは、中学校でも学習した事項に入るだろうから、ローマ帝国の崩壊後、そして中国では三国南北朝——これを秦漢古代帝国の崩壊としてとらえることもできる——丁度このころから北方に遊牧民族・ゲルマン諸族・ノルマンなど新らしく姿をあらわした諸民族の巾ひろい行動範囲をもった動きが開始される。ヨーロッパが歴史の舞台になるのもこれ以後だし、イスラム文化圏が形成されるのも、中国で江南に貴族社会が形成されて、その北方の遊牧国家との抗争の過程を通じてユニークな文化を形成するのも（又その文化が日本の古代王朝と貴族文化に大きな影響を及ぼすのも）これ以後だろうから、一方ではイスラム世界とヨーロッパ世界を対比させることによって、そして東アジアでは北方遊牧民族国家と漢民族の文化と王朝の運命とを交錯させることによって、近代以前の全体としての世界史像をつくることのできるのではないかと期待したからである。

その試みは成功したとはいえない。もし成功したならば「諸文明圏の形成」という指導要領の路線よりも

多少ともまじな世界史学習プランができたのであろうが、結果としては試行錯誤の1つに終わってしまったようである。この時期の学習をテーマ別に生徒に選択させ、発表させようと仕組んだのは、生徒の側の主体的積極的な学習を期待してのことであるが、これも期待したようにはゆかなかった。

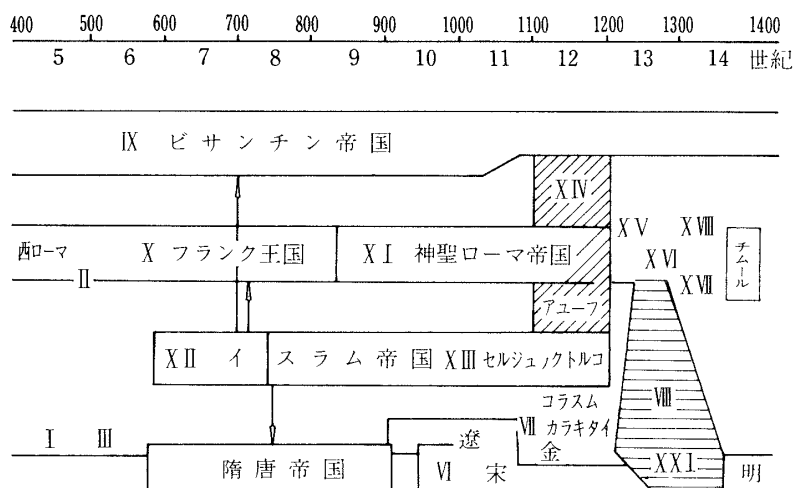
主なテーマは次の通りである。

## 世界史 研究テーマ

1. 中国社会と北方遊牧民族の動きーそのかわり  
を調べてみよう
  2. ゲルマン民族とその移動ーそれがヨーロッパ世  
界の形成にどのような影響をおよぼしたかー
  3. 中国貴族社会の形成と六朝文化ー江南に展開し  
た中国的貴族文化はどのような経済的基盤の上に  
立っていたか
  4. 隋唐帝国の成立ー唐代の政治と社会のしくみは  
どうなっていたか
  5. 律令制の展開と貴族文化について
  6. 宋の統一と社会経済ー中国はどのように変ったか
  7. 遊牧国家・遼 西夏 金ー中国の北方に出現した  
遊牧民族の国家と社会
  8. モンゴル国家の発展ーモンゴル民族は東西の世  
界にどのような影響を与えたか
  9. ビザンチン帝国とその文化ー千年にわたってつ  
づいた帝国の遺産は
  10. フランク王国とローマカトリック教会ーキリス  
ト教とヨーロッパ帝国のかゝわり
  11. ヨーロッパ封建社会の成立について
  12. イスラム教・イスラム世界の発展
  13. イスラム帝国の分裂とトルコ帝国
  14. 十字軍の起りとその影響について
  15. 中世都市の発達・商業貿易
  16. 教皇権の衰退と王権の成長について
  17. 荘園・封建制度の解体ーどのように中世封建社  
会はかわっただろうか
  18. イギリス・フランスの中央集権国家成立
  19. 中世末のドイツ、イタリアの情 400      500  
勢について調べてみよう 5
  20. ロシア、モスクワ大公国の成立 \_\_\_\_\_  
についてービザンチン帝国・モン \_\_\_\_\_  
ゴルとのかかわり \_\_\_\_\_
  21. 元朝の中国支配ーモンゴル民族 \_\_\_\_\_  
は中国をどのように治めたかー 西ローマ  
\_\_\_\_\_ II
  22. 東西文化の交流ーシルクロード \_\_\_\_\_  
の開発からマルコ・ポーロまでー \_\_\_\_\_  
テーマの大枠は私の方で設定し、そ \_\_\_\_\_  
のなかみについて生徒の関心と資料・ \_\_\_\_\_  
図書などの内容で伸縮の幅をもうけ \_\_\_\_\_
- I III

したがって各クラスで若干テーマ内容が異なってきたが、この22のテーマ構成の意図を若干補足しておきたい。

出発点に4～6世紀のユーラシア北方民族の動向をおいた意図は先述したが、ただ単に東洋史、西洋史の中から時代別に歴史内容を分担するのではなく、この時期のユーラシア北方の民族の動きがアジア北辺についても、ゲルマン移動期のヨーロッパにも大きな刺激をあたえ、世界史成立の端緒をつくっている——ヨーロッパがこのころ開かれ、中国の江南も、日本も、そしてイスラム世界もそうした動きの中から形成されたということ——そのあたりのことを1～3のテーマで分担し、隋唐帝国以降の中国、ヒザンチン帝国、ヨーロッパ封建社会、イスラム帝国を対比させながら6～11世紀の世界を調べ、レポートさせる。(4～13のテーマ)、更に十字軍からモンゴル帝国のユーラシア支配の時期12世紀から14世紀の間において、ヨーロッパに中央集権国家が生まれ、近代が準備され、ヨーロッパ・イスラム・アジアの間に交流の崩しがみられる。(14～22のテーマ)全体のテーマ構成としては「文化圏学習」以前の世界史学習のすゝめ方にもどした観念にしもあらずということかもしれないが、私の意図は文化圏の枠をこわすことではなく、(4～14世紀のこの間は普通文化圏として概括されて学習をすすめられる内容のところである)総体としては、それぞれの文化圏ごとにユニークな発展をとげながらも、ある時期ではそれらの文化圏の枠をこえて、他の文化圏からの大きなそしてかなり長期間にわたる衝撃をうけ、それが歴史の発展の大きな要因となる場合がある。梅棹忠夫氏の所説を借りれば<sup>註(4)</sup> アロジェニク、サクセッションにあたる。古代末期から近代の黎明期にいたるユーラシア大陸の歴史の歩みの中で、そのアロジュニク、サクセッションの第一は5～6世紀の民族移動であり(別表のⅠⅡ)第二は12～13世紀の十字軍であり(表中のⅩⅣ~~斜線~~)で示す)第三はモンゴル民族の帝国支配であった。



その3つをのぞけば古代末期——近代までの各文化圏の歩みはオートジェニック(自成的)サクセッションとして把握できるのではないかというのが、私の意図の下敷きになっている。

#### 4. 生徒の学習記録ノートから

##### — 発表形式の授業のメリットとデメリット —

数年前から世界史の学習のさい、各クラスにノートを手2〜3冊用意し、それぞれ順番に授業の内容とそれについての感想、質問等を記録してまわさせる学習ノートをつきさせている。それは各クラスでの授業の進度のちがいや問題点の所在の差異、生徒の反応、疑問を確めることにも役立っているが、発表形式の授業をする時には特に大きな役割りを果たことになる。

発表学習に入った当初、「今日から発表でやることになります。発表する人はよく調べていてよかったのですが、聞く方からみるとどうノートをとったらよいか困ります。」「よくわからなかった」という反応が多く、発表に対する質問などクラスによっては全く出ないという状態であった。こうした学習法を採った第一のねらいが、この発表を中心にしていろいろの角度から質問や意見が出て、クラスの全員に世界史を身近に感じさせるところにあったとするならば、まず出だしにおいて失敗を重ねたともいえる。

ようやく学習が軌道にのってきたのは、発表のレジюмеともいべきプリント(すべてワクを指定し、体裁をはき一定のものにさせた)が、前の発表者のものを参考にして整備されるようになり、私と発表者との事前の打ち合せが何となく定期的に行なわれるようになってからである。

「この時代の以前のことを理解してないせいか、流れがつかめず、ひとつひとつのはんの些細なことでわからないことがたくさんあったので、プリントの一枚の半分だけを理解するのに悪戦苦闘でした。それに、プリントは簡潔にまとめすぎてて、授業中にきいても少し意味のつかめないところがありました。その点を納得のゆくまで、人にきき、書物で調べ、100%理解したつもりで、自分なりにわかりやすくまとめてみました。

私が初め発表の時にはほとんど理解できなかった。ひとつの大きな原因として、「法王=教皇」を知らなかったことがあります。だから、ここではまた混乱しないように、「教皇」だけで統一しました。

最後に、私は、このフィリップ4世という人は、すごく高慢ちきな人だなあと思いました。この場合に限らず、あらゆる場合において、人間ひとりひとりが、ほんの少しの心づかい、思いやりをもって相手に接すれば、戦争や争いごとなんてなくなるのじ

ゃないかな」

「イスラム教・キリスト教・仏教…と宗教の与える影響はすごく大きいんだなあと思いました。そんな宗教を日本人である私達はあまり信じませんが…苦しい時の神だのみという程度では?

ものすごく熱心な人を見ても「ああよくやってるなー」と思うだけでやっぱりこんなではいけないのでしょうか?

少々、さわがしかったせいか、発表する人の声が小さかったのか、よくわからないけれど聞きとりにくい所がありました…発表する前には大きな声でやろうとか、いろいろ考えるのですが、いざ前に立ってやると何もわからなくなってしまってそれに、黒板に書いている時はどうしてもそちらの方に気をとられるので、発表を聞きのがしたりすることがあった。」

週5時間位のゆったりとした進度で学習時間が保障されているならば又別の扱い方もあったと思うのだけれど、週3時間で一学期一ぱいには近代の入口のところまで行かねばならぬという制約をもっているのは、発表のどこから歴史を考えることをひき出すか、ということが、最も指導のポイントにならざるを得ない。

したがって発表は極力簡潔平明にして、その中で特に指摘したいことだけを時間の中で展開することになる。

「どうしてビザンチン帝国は1000年もの長い間続いたか?自分なりに考えてみましたが、6世紀の後半、イタリアにランゴバルド族、7世紀にはアヴァール人、スラブ人が侵入し、東方からはササン朝ペルシア、ついでアラブ人が進出しシリア・北アフリカ・イベリア半島の領土を奪われた。そして帝国の領土はバルカン半島に縮少し、8世紀以後カール大帝により独自のビザンチン帝国が形成されたことから、小さくまとまった帝国だったので、皇帝の権力が全土に及び支配できたのだと思います。

それにしても1000年は長い!自分が今まで生きてきた17年なんて本当に歴史の極く、極く1部でしかないんですね。たとえ100才まで生きたとしても1000年の1/10でしかないんです。その1000年も歴史のほんの1部…。

それらの長い長い歴史を今我々は勉強しているわけではなく不思議な気持ちになってきます。

私は時々「本当にこんな事があったのだろうか?」って疑ってみみるのです。書物などに書いてあるだけでは満足がいなくて実際にこの目で見てみたい!タイムマシンがあるのなら昔に坂登ってみたい気分です。でもこれまでは多くの悲惨なでき事もあったのですから目にしない方がいいのかもしれない。ただ言えることは、過去がなければ現在の私もない

わけですから、歴史上、大きな功績を残した人々、また、そのために犠牲になった人々のことを忘れてはならないと思います。（前の人と似てしまったかな？）」

学習というものは——世界史学習だけではなく、すべての教科についていえることかもしれない——知らなかったことを知り、憶えるということではなく、既知に属していた事項の中に、実は気がついていなかった新しい事実を確認し、それを自分の関心の枠の中にひき込んで、自分で使いこなすことができるような知識に育てあげることではないだろうか。

「世界史の授業のあとはいつも変な気分になるので。なぜなら信じられないことばかり出てくるから…今授業でやっているのは7, 8, 9世紀にかけて！もう1000年以上も昔になるのにどうしてこんなにしくわかるのか、そして今日授業でならった唐三彩！この時代にこんなにりっぱな陶器があったなんて信じられない。

世界史と日本史とかの科目はほんとうに一風かわったものに感じられてしかたがないのです。

今日の授業では玄奘に関することが一番印象的でした。内容からいくと、律令制の崩壊の方が大切だと思うのですが、なぜかあの三蔵法師についてもう少し知りたいのです。」

「今日が昨日の続きであるように、今年も昨年をつづきであり、今日は明日になれば歴史の一部である。そして歴史があるからこそ今があるとも言えると思うのです。

中国の歴史は名前が複雑でむづかしいと思います。また宋が栄えたようにその後もずっと栄えていたら今の世かどう変っているか想像するとおそろしくなってくる。

また人間ってどんどん物を発明してくるものだなあと感じました。」

「宋にしろ、唐にしろ、全体的に長くつづいた王朝のほうかいのしかたは1つのパターンのような物があるのではないかと感じた。

その1つに「南へにげる」ということがあるような気がする。北方民族は、短命であるけれど、すぐに新しいつよい国がうまれてくる。この王朝や、国のうつりかわりのようすをみても、漢民族と、北方民族のせいかく的なものがうかがえるのではないだろうか？長い平安を好む漢民族にくらべ北方民族は活気にあふれて、いつも自分のまんぞくするように個々に国をつくろうとしている。漢民族は、すぐに、その時代のすぐれた文化におぼれるけいこうがあるのでは？」

「授業を受けながら、このノートに直接書いていこ

うと思うと、忙しくて、とても無理なので（他の人はどうやっているのかしらん？）先生のおっしゃることを聞きもらすまいとすべく、耳に神経を集中させ、自分のノートはメモ程度にしました。

「それでも」というのか「だから」というのか、どちらのことばを使ってよいかわからないのですが、『王の親衛隊として、千戸長の子供をつける』とかいうメモ——自分が書いたにも関わらず——を後から見てみて、「はてな？これはどういうことだったかしら？」などと頼りない結果になってしまいました。そこ以外の部分は、よくわかっている（つもり）ののですが……

最近の授業の内容は、おもしろいと思います。

と、いうことは過去におこったその出来事が興味深い事であったってということになるのですかね——歴史の授業なんだから。

私は、時々こんな事を考えます。

自分が初めっからいない世界って、どんなふうになるのだろう——と。

まず、家族は、私のことなど知らないわけですから私をメキにした家庭生活が営まれるでしょう。

（すると、今、私の部屋のある2階はなくて、平屋になっているのかな？）

学校の友だちも、

私との関りあいがなくなるのですから、一つ世界が狭くなるでしょう。もちろん初めっからいないのだから、

そんなふうには、思いもしないのでしょうか——。

自分か、それほとに友だちに何らかの形で関わっていて、少しでも影響を及ぼしていると考えるのは、うぬばれかもしれない。

でもそうでなければ、

ちょっと淋しい気がします。

——と、いうように、もしチンギスハンが存在していなかったとしたら——。

これはとても大変なことです。一大事です。

全て過去として、ぬりつけられてしまった今となつては、そのまま受け入れられて、あたり前なのでしょうが、飛躍しすぎてもいいから、真剣に考えてみるとゾッとしてくると思うのです。

どこでどう作用して、現在にひびいてくるか、一種神秘的です。

だから、過去のことだ、当たり前のことだとそういうふうにとらえるのではなく、もっと一つ一つの事からを大切に見ていかなくてはいけないと思うのです。自分を今、ここに、存在させてくれているいっさいに、感謝の意を表さねばならないでしょう。

それはつまり、歴史を正しく理解していくことなの

だと思います。(終わり)」

やゝ長文を引用したきらいがあるが、そのそれぞれの生徒の意識の中に「歴史の中から何かを考える」という構えが出来かけてきたと感じたからである。それは必ずしも発表学習だからではない。講義の中で可能なことだとも思う。自分たちの仲間の発表ということからくる親しさが、内容の乏しさを補ってあまりあるものかもしれない。それはどの価値もない内容がレポートされることも時々ある。しかしそれを「時間が無いから」としてトバさせるのはやはりどうかと思う。

「成吉思汗と義経が同一人間であったなんて有り得ないことなだらうけれど、いろいろと想像してみるのは楽しいことです。

でも、この成吉思汗という人、本当に戦いの天才とか人をあやつることがうまい人だとすごく感心しました。もしもっと長生きしていたら次々とすごい手段を考えてヨーロッパも征服していたと思います。4人の子孫たちもせっかく成吉思汗がまとめてくれた領土をつまらない内輪もめから、バラバラにすることはなかったのに…。(もったいない。)

隋、唐の時代でも、このモンゴルでも、そして日本でも、血縁関係など無視されているという感じがします。弟が兄を殺し、兄が弟を殺し、母が子供まで殺してしまうなんて…。皇帝というものはそれほど魅力のあるものでしょうか？

もしバトウという人がワールシュタットで引き返さなければ、彼はヨーロッパ諸国を征服できたかも、いえ、多分できたと思います。なのに国王になりたいばかりに、引き返してしまうなんてアホじゃない？うまくやればヨーロッパ諸国の王になれないのに。まだ文化の面をやっていないけどあのマルコ＝ポーロが出てくる様子なので楽しみです。それから駅伝制というのがよくわからなかったのですが何のことですか？

それにしても遊牧民族というのは世界の歴史上にとっても大きな役割を果たしているのですね。」

## 5. まとめにかえて

数年前の生徒たちに比べて「活気がない」「たゞ覚えようとしかない」「何のために勉強しているのかわからない」とよくいわれる。(それは本校の入試選抜による特殊性もあるが、多分に一般的傾向で、高校大衆化のあらわれといってよいだろう)授業中かなりシラけていると感ずるフシもある現状の中で、最初はいやいやながら研究調査をまとめていた生徒の中に、思いもかけぬ積極性をみつけることがある。その積極

性の芽を分析すると。

(1) 自分の興味のある国の生いたちや人物を自分なりに調べられたという満足感。

(2) その基底にある関心がたとえ、テレビの番組や漫画であったとしても、それは学習へのとっかかりになり得る。十字軍や、ばら戦争、マルコ・ポーロ、フランス革命について森川久美の「青色魔園」<sup>註(5)</sup>池田理代子の「ベルサイユのばら」がどのようなイメージを与え、歴史的認識の形成に多少なりとも歪みをもたらしていることは想像できるが、だからこそそれらの内容を正面にとりあげて、教材化することも必要である。

(3) プリントをつくったり、OHPのシート製作を通じて面白さを見つけ、工夫をこらすという場面。

(4) 発表者に対して、質問や反論が飛び出す場合、それは発表自体不手際なときが多い。

うまくゆかなかった点は

(1) 発表について質問が出なかったクラス。特にゼミ形式にして学習を深めさせようと考えた意図はほとんど果されなかった。

(2) クラスの進度が同じで、図書館での資料あさりに不都合を生じたこと。

(3) 公式的解釈、受験参考書的なまとめを先に生徒達の方で要求する。だから関心はそこでストップする。

何よりも、4時間が3時間に制約されたことは大きい。特に生徒を活動させ、漫画やテレビのドラマまでも教材に組み込もうとすると、決定的に時間が不足する。

註(1) 昭和45年の指導要領で世界史が3単位になっても本校では4単位でつづけてきたが51年度から3単位とし、3年の選択に世界史2単位を加えることにした。

(2) 世界史の構造と範例的方法の検討(都築 亨) 名大附属研究紀要18集 (48. 3)

世界史の学習内容における他教科との関連性

(都築 亨) 名大附属研究紀要19集(49. 3)

(3) 吉田悟郎 歴史認識と世界史の論理 勁草書房 P46

(4) 梅棹忠夫 文明の生態史観 中央公論社 P91

(5) 森川久美 青色魔園 天のたいかん(白泉社)

それがばら戦争についてのあるクラスの発表であった。

竹宮恵子の「ファラオの墓」は歴史の勉強にはやや不向きであったが、森川久美「レヴァンテの黒太子」手塚治虫「ブッダ」池田理代子「オルフェウスの窓」等は扱い方によっては世界史の学習にもかなり有効ではないかと考えている。